

家族ってなに？

石井 美雄

フォトグラファー(大阪市)

突然、解任されるまで「中途採用の父親」を10年やった。26歳の時、恋をした相手に8歳の男の子がいた。考えた。エミールからマカレンコまで手当りしだいに教育書を読み漁った。得た結論は、「さびしくないように、ひもじくないように」する、それだけだ。

結婚した相手が、料理嫌いだったこともあって大半は私が台所に立つようになった。後半はほとんど私が家事を受け持つようになっていた。やがて、我家なりになんとか回っていくようになった、と思っていた頃に私一人では太刀打ちできない困難にぶち当たった。「学校」と「教育」である。息子が少しずつ学校と折り合いが悪くなっていったのだ。

「教育」をめぐる妻と、後に妻の両親とも齟齬をきたすようになった。息子が不適応ながらも中学を卒業。高校進学を選ぶ時、妻と彼女の両親は「せめて、高校ぐらいは」と言った。私は職業高校を落第して4年かかって温情で卒業させてもらっていた経験から、「自分の生きる道、やりたいこと」を見つかるのが先だ、学校なんか行かなくていいと主張した。

本人は脅かされ、すかさず教師に指定された学校を本意でもなく受け合格した。しかしすぐに、些細なことで高校の教師から手ひどく殴られ、入ったばかりの学校を1週間でやめた。それから家に閉じこもったかと思うと、夜の街をさまよい歩き所在のわからない日々が続いた。私は目を離さないように暮らし、やがて音を上げた。そんな日々が何かが過ぎた頃、息子は仮枠大工の仕事を見つけてきて通うようになった。

やれやれと思うと今度は妻の方が帰って来なくなった。そしてある日「好きな人ができた、別れてほしい」と言い渡された。それからひと月経った暮

の日に私は出て行った。あれから、独り6年目の春を過ごそうとしている。

私は今、出産や育児、働き方や暮らし方を問いなおすための写真を撮り続けている。「家族って何だろう」と答を捜し求めて、さまよっているのかもしれない。ここに静岡大学と東京学芸大学の94国際比較調査「家族の中の子どもたち」の結果がある。上海、ソウル、ロンドン、NY(ニューヨーク)、東京の5都市小学5年生の生活を調査したところ、家族は、上海は3人以下、ソウル・東京は4人、ロンドン・NYは4～5人、6～7人もかなりの数にのぼる。親の離婚再婚の繰り返して兄弟の数が増えるとか。父親の同居率はロンドンが最も低く、次いでNY。では母親はどうか。専業主婦が目立つのはソウル。ロンドン、NYは専業とフルタイムがほぼ同数で各3割。上海は92%がフルタイム。東京は専業がソウルに次いで多く、フルタイムは5か国の中で最低。東京では子ども達は男女とも専業主婦志向が7割を占める。ロンドン、NY、上海は共働き志向7～9割という結果。

さて子ども達はどんな将来像を持っているか。「幸せな家庭を作る」と自信を持っているのはNY、次いでソウル。「仕事で成功する」と答えるのはソウル、上海の順。東京の子ども達は、家庭的にも社会的にも将来に自信を持てず最低の答しか返ってこない。これには東京の子ども達が掃除や洗濯などの家事に参加する割合が最も低いことも関係していると私は思う。欧米では「家族」とは血縁よりも「貧しくともみんなで働いて、ひとつのパンを分け合う人々」とイメージされていると聞く。ステップ・ファミリーや、里親制度が日本より当り前で盛んなのはそんなところにあるのではと私は考えている。